

書 評 と 紹 介

丹野清人著
『越境する雇用システムと
外国人労働者』

評者：宮島 喬

対象としての日系人

2007年末の数字では、ブラジル人約31万人をはじめ、ペルー人、その他中南米系の外国人登録者数は約39万人に上り、日本の登録外国人全体の18%を占める（『在留外国人統計』平成20年版）。そのほとんどは、在留資格から推して、「日系」と推測される。ただし、日系人本人の配偶者であれば、日本人祖先との血の繋がりの全くない者（「非日系」）でも同じビザ発給を受けられるから、在留資格からの推定は民族的な日系人を正確に捉えることにならない。また、言語や来日の仕方からして「日系×××人」とみなされながら、日本国籍を保持している者も少なくない（日本・ブラジル二重国籍者も含めて）。

このように複雑さはあるが、本書が対象とするのは、合法の、就労に制限のない、いわゆる「日系人ビザ」（「日本人の配偶者等」「定住者」）の下に入国、滞在、就労している（あるいは失業中の）外国人労働者である。この内、「永住者」に転じている者も今では10万人を下らない。

自動車関連の部品・車体工場の立地する愛知、静岡、三重など東海地方と、群馬など北関東が主な居住地であるが、近年その就労分野も電機、建設、食品などに広がっている。

「日系人」、この外国人グループの独自性については、業種による偏在、言語、アイデンティティ、居住行動とコミュニティ、子どもの教育問題などを主題に、これまでかなりの議論と研究がみられるが、本書のように日系人がその中に位置づけられている労働市場の構造と論理を、詳細な事実確認によりつつ理論化したものは意外に少ない。嚆矢とすべきかもしれない。

しかも本書では、必要労働力調達とコスト削減という二大経済衝動の下にごく製造業企業の行動を追いながらも、社会学者の眼といおうか、経済外的な関係形成や制度形成が労働者にとってもつ意味と、労働者、ブローカー、業務請負事業者など諸アクターの行為の志向の絡み合いへの関心が強くはたらいていて、示唆に富む労作になっている。いわゆる新古典派的な二地域間の経済格差・賃金格差モデルによって押し切るマイグレーションの説明に馴染んできた者には、多くの刺激が与えられるはずである。また、文化主義的といおうか、移民者が父祖の地へ帰還してくるとみる民族的・文化的絆を重視する日系人リターンマイグレーション論にも、別の視角の存在を突き付けるものとなろう。

なお、本書のいくつかの章は、本誌、『大原社会問題研究所雑誌』の過去の号に掲載されているから、ここに書評に取り上げることは、格別の意味があるかもしれない。以下、本書の主要なテーマを取り出して、紹介しつつコメントする。

トランスナショナルな雇用システムとは

本書のキータームの一つは「越境する雇用システム」であるが、念のために言えば、労働者の就労の場、賃金稼得の場はあくまでも日本国内の特定された地域である。しかし、とかくみられるように外国人労働者問題を「国内問題」と捉えるのではなく、少なくとも二地域間に結ばれ、成立する関係性こそが明らかにされねばならないとする。そのためには、両国、両地域をフィールドとする研究を行なわねばならず、容易なことではないが、著者はこれをエネルギーギッシュな調査活動によって実現してきた。

そこでの知見は、ブラジルではデカセギという行為は以前から存在していたが、80年代の経済混乱、日本との直行便空路の開設、90年入管法改正を各契機として、関わる行為主体が変わってきたこと、ブローカーという行為者の登場と活動により期待実現の制度が形成されたこと、一方、日本の受け入れ企業側では、働き手を見いだせない職場が彼らを迎えるわけだが、近年、絶対的人手不足は終焉していること、戦前から高度経済成長期までの日本の出稼ぎのどのタイプにも合致せず、「都市雑業層型」に属するとみられること、等である。論証や比較が欲しい点も残るが、新たな事実発見に挑む大胆な整理である。

では、「都市雑業層」という捉え方はなにゆえか。従来からも日系人の就業形態について、間接雇用、業務請負形態が特徴であることは言われてきたが、なぜそれが、日系人の場合に、かつグローバル化のなかの現代製造業において形成され、それなりの「合理性」をもって機能したかについての考察は欠けていた。これは本書の重要なチャレンジであろう。企業はグローバルな競争に巻き込まれ、競争力維持のために省人化を行ない、下請企業にいつそうのコスト削減を求めるが、そこでは、労働者への労賃と

して配慮する必要がなく、製品の製作費用として扱える業務請負契約のほうが調節可能で、低コストとなる、と。

この業務請負業の現場の様態の詳細な検討(8章)は、教えられるところが多い。それは、従来は日本人の季節工や期間工やパートによって担われてきた部門を引き受けて、予測困難ななかで、必要労働のみを調達、配分していく、調節と低コスト化の働きをその役割とする。バブル後の企業の正社員の削減、その部分の雇用のアウトソーシングへの代替という要請に見合せて、このシステムは拡大していった。

そして日本人の募集よりも経費の低廉な、情報が均一に伝わりやすく、必要数を確保しやすい日系ブラジル人労働者が、業務請負の担い手になりやすい。彼らが最も縁辺の労働力だからといってしまえばそれまでだが、つねに日系ポルトガル語新聞に接し、携帯電話を手放さず、均一意識をもちやすい彼らの一種の文化も、ここには関わっていると看做する。

地域労働市場の成立と総合デカセギ業の機能

日系ブラジル人たちにおける「地域労働市場」の成立とは、どういうことだろうか。

彼らが合法的に自由に就労可能であるために、ブローカーたちはかなり公然と「リクルーター」及び「ディストリビューター」としての媒介機能を行使し、募集した労働者を、日本での業務拠点とのつながりで、豊田とか豊橋とか大泉とか特定の地に送り込む(相当額の紹介料、手数料と引き換えに)。それは彼らが入居可能な公営住宅団地の存在なども考慮しながら、行なわれる。本書はそれを「ピンポイント移住」と名づけているが、これは指摘されてあらためて気づかされる点である。プッシュ・プル図式による新古典派的な移民理論では、こうした地域市場の成立は説明しえない。ちなみに同じブ

ローカーが、当の地域内で学校、保育所、種々の代理業を多角経営し、ビジネスを営んでいる事実があり、まさに「ブローカーの社会学」（2章のタイトル）が必要だという主張は、説得力がある。

ブラジルの現状では、更なる組織化、発展というべきものもみられ、日系旅行エージェントと業務請負業の連携がいつそう密に、そして多面的になっている。その連携のなかで募集が始まって、「デカセギブーム」が生じたのだった。これらが代行するのは、就労先探しと住宅探し・紹介、ビザ取得のための書類作成、そして航空チケットなどセット旅行の手配であり、かつ、その旺盛なビジネス性を強く認識させるのは、就労場所が決まる前に日本就労希望者を送り出してしまふ業者の存在である。これは、日本側に緊密に連携する請負業者をパートナーにもっていけばこそ、可能となる。現地調査を行った著者は、このようなネットワークも含めて「総合デカセギ業」の誕生として論じているが（10章）、これだけ具体性に富んだ紹介と分析は前例がないだろう。

豊田市をフィールドとした労働市場のマイクロ分析（9章）は一部、著者の参与観察の成果であるが、外国人労働者と、とりわけ業務請負業者の日常的行為を、「国際団地」とも通称される郊外の一団地（そこでは一部が法人貸しされ、3000人の日系人が入居）という場と関連づけて活写していて、社会学的には興味深い記述からなる。

業務請負業者の最大の仕事は、取引先の業種や事業所によって日々異なる必要労働力を、その通告やあらかじめ決められた予定表に従い、調整し、送りだす作業である。取引先との絶えざる連絡・打ち合わせに追われるが、労働者個人のケアまでもがその仕事となる。複数の通訳を擁し、職場でのこと細かなトラブルから、労働者たちの母国への送金の手伝い、役所関係の

手続き、子どもの就学のための教育委員会の手続きの同行まで、席のあたたまる暇もない。請負業が、日本人の嫌う現業労働の、それも変動してやまない需要に対し増員、減員、解雇、残業増加、その削減などによって対応する、かつ労働者の個人的トラブルをも解決する、まさにフレキシビリティを保証する装置であることがこのマイクロ分析を通してよくわかる。

労働市場はなぜ分断されるのか

外国人労働者の労働市場上の位置を再度確認しよう。

基本的事実として、賃金・福祉の日本の企業規模別格差の大きさが、中小の自動車下請け企業をして、外国人の使用へと赴かせる。時給だけから見ると日本人アルバイトやパートよりも高額とみえる彼らは、残業をこなすこともあって、月給で男子30万円、女子20万円に達する。しかし、正社員なら必ず計上される賞与、法定福利費、退職金などが、業務請負業者に支払う外部委託費ではゼロとなっている（本書4章で紹介されている一例）。こうした条件を受け入れて、長時間労働で補おうとする存在としての外国人、それがまず日本人から分断された労働市場をつくりだしている。意思疎通のため通訳スタッフを配置しなければならないという必要も、日本人と区別した集団として彼らを管理するよう促す。

ここまでは従来多くの研究や調査が指摘してきたことだが、本書はさらに日系人の職場がなぜ出身国・国籍ごとに分断され、セグメント化されるのかという点にも切り込んでいて、著者ならではの豊富な調査・情報収集と、洞察は活かされている。例えば、同じラテンアメリカであっても、日系ペルー人は雇用機会がより少なく、賃金もより低いのはなぜか。彼らにはメデ

イアによる均一の雇用情報が行きわたらないこと、やむをえざる理由から偽造書類が使われやすく、当局の摘発を恐れ、大手の事業所は彼らの使用に消極的であること、などが理由として挙げられる。また、同じく合法就労できる「日系」でも、フィリピン人の場合、送り出す旅行業も発達せず、雇用する業務請負業者は少なく、雇用機会も限られ、「研修生」の資格で、非常に異なる条件で就労している、等々。

こうした労働市場のいわばエスニックな分断は、つづめて言えば、比較的単純な原則——著者は「戦略的補完性」と呼ぶ——によっている。状況の推移のなかで企業の直接雇用が減り、業務請負が一般的な形態となっていくにつれ、この多数者の戦略に自らの戦略を合わせたほうが自分の目的も達成しやすくなると思うところから生れる秩序がそれである。しかし、これは単に数の論理をいうのではなく、安定性や社会的評判を考慮する行動でもあろう。企業も業務請負業者も、その点も加味して、摘発の確率を考え日系ペルー人よりはブラジル人を選好する。数的にきわめて小さいフィリピン人も、その対象にはならない。こうして日系人のなかに階層性が生れていくことにも著者は注意を喚起している。

課題あるいは論点

以上のように、網羅的にではなく、やや選別的に本書の中心的な考察、分析をたどってきた(11章「在留特別許可の社会学」には触れられなかった)。事実と資料に裏付けられた著者の分析は説得性がきわめて高いと評価するものがあるが、二点ほどにわたり評者のコメントを対置しておきたい。

今日、日系人労働のゆくえを考える上で一つの大きな論点は、言葉の曖昧さを覚悟の上で言えば、彼らの日本定住の可能性如何である。こ

の問題が果たして労働市場や雇用システムへのアプローチから解けるかという点では、評者は疑問なしとしない。本書のなかでは、業務請負のなかに生きる労働者たちが、失業のリスクや住宅喪失のリスクも織り込んで、一家の中の就労者を増やしたり、住宅のシェアリングをしたりし、生き残り戦略を展開していて、生活エンジョイ型のスタイルや持ち家取得が見られるからといって、定住を意味するものではない、と論じている。だが、定住か否かは、労働外の彼らの生活行動をみずに簡単にいえるものではない。その一つは、たとえば家族、特に子どもに関わっての行動である。今日、滞日ブラジル人の15歳未満人口は16%に達し、日本の学校への就学を通して日本化し、母国語を喪失している子は多く、帰国させて最適応が可能なのかどうか迷っている親は多い。子どもの教育問題からアプローチしてきた評者(太田晴雄との共編『外国人の子どもと日本の教育』2005年)の観点からは、この面から定住可能性を推測せざるをえないのである。評者がインタビューでうかがうかぎり、ブラジルへの帰国を肯定する第二世代の若者は非常に少ない。

さらに、本書では日系人第二世代の動向が、区別して注目され、論じられていないが、入管法改正からやがて20年、彼らもまた労働市場に登場するようになっている。日本の中学、高校に学んで、就労しようとする彼らは、やはり業務請負業者の門を叩くのだろうか。そういう例もあるが、「日本人と同じように働きたい」という願望が強いということも言われている。業務請負労働力の世代的再生産は行なわれるのか、それは単純に肯定もできないように思われる。

いま一つの論点は、「日本の合法外国人労働者の雇用市場は業務請負業に収斂した」(54頁)という本書の基本的認識と、契約労働者の「人間的存在の回復」(34頁)という課題意識、さ

らに、「なぜ正規雇用者と不安定な非正規雇用者が固定されることが正当化できるのか」(27頁)という正面からの問い、をどのように結びつけて、将来を展望する現状判断へとおもむくのか、であろう。日本語能力の不十分な、欠勤の多い労働者は現状の制度のなかでも淘汰されていくという。とすれば、日本語の習得に努め、勤勉さと努力によってスキルアップを図る労働者には、直接雇用、あるいは正規雇用への道が開かれる可能性があると考えられるのか。本書はそのような見方は楽観論としてしりぞけるかもしれないが、とすれば、どこに現状を突き崩す道を見出すのか。

日本の外国人労働者受け入れは、さまざまなフィクションと偽装を含んで進められ、改めて現時点でみると、きわめて大きな差別、不公正

を制度化するものになっている。いわゆる単純労働にも就きうる合法外国人労働者受け入れを日系人の優先受け入れとして行なったことも、その結果に寄与していよう。グローバル化経済の進める「差異化」のなかでは、日系人の置かれている地位も、不公正としてではなく、単なる「差異」の一つとみなされる傾向にある。数年来、研修生問題から火がついて、受け入れ制度の再考が中央省庁を揺るがせているが、日系人の現状に対する反応はなぜか鈍い。彼らの受け入れと労働市場の対応のあり方についても、大いに議論が起ころねばならない。

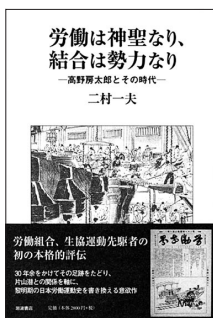
(丹野清人著『越境する雇用システムと外国人労働者』東京大学出版会、2007年12月刊、v+328頁、定価5700円+税)

(みやじま・たかし 法政大学大学院社会学研究科教授)

労働は神聖なり、 結合は勢力なり

—高野房太郎とその時代—

労働組合、生協運動先駆者の波瀾万丈の生涯



二村一夫

四六判・322頁 定価2940円(税込)

労働組合、生協運動の先駆者・高野房太郎(1869-1904)の生涯を、生い立ちから在米時代、運動家時代、運動離脱後まで描く初の本格的評伝。片山潜との関係を軸に黎明期日本労働運動史の真相に迫る意欲作。図版多数。

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
<http://www.iwanami.co.jp/>

岩波書店

